

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	若年層の名古屋市方言における終助詞「ガ」「ガン」「ジャン」
Author(s)	稲熊, 詩帆
Citation	論叢 国語教育学, 17 : 1 - 11
Issue Date	2021-07-31
DOI	
Self DOI	10.15027/52306
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052306
Right	
Relation	



若年層の名古屋市方言における終助詞「ガ」「ガン」「ジャン」

稲熊 詩帆

1. はじめに

本稿は、愛知県名古屋市方言における終助詞「ガ」、「ガン」、「ジャン」の統語的特徴および意味用法上の特徴について、共通点と相違点を中心に考察する。「ガ」と「ガン」は当該方言における「ガ」系の終助詞の一部である。「ジャン」は他方言から流入したとされる形式である。以下(1)~(3)に示す通り、当該方言において「ガ」、「ガン」、「ジャン」はおおよそ共通語の確認要求表現形式「ではないか!」にあたる意味で用いられる。各形式は意味用法が類似しており、互換性がある場合が多い。

本稿で示す例文は漢字ひらがな交じりで示し、議論の中心となる形式をカタカナで示す。文末の母音の長短は書き分けず、長音記号は付さない。また、引用した例文は出典を示す。特に断りが無い場合筆者の作例である。適宜共通語訳を示す。「*」は文法的に容認されない、「??」は文法的に容認しづらいことを示す。「#」は当該文脈で不自然であることを示す。

- (1) A:味噌カツは味が濃すぎて苦手だわ。
B:えー、うまい {ガ/ガン/ジャン}。
(えー、おいしいじゃないか。)
- (2) [外に出たら、雨が降っているのに気づいて]
あっ、雨降っとる {ガ/ガン/ジャン}。
(あっ、雨が降っているじゃないか。)
- (3) [待ち合わせ場所を決めているときに]
A:ほら、新幹線口に銀色の時計がある {ガ/ガン/ジャン}。
(ほら、新幹線口に銀色の時計があるじゃないか。)
B:はいはい。

「ガ」と異なる「ガン」と「ジャン」の共通点として、当該方言における新しい形式であることが挙げられる。さらに、両形式は終助詞「ネ」が後接しうる。その場合、共通語における「よね」と同様の機能を表す。例えば、例文(4)の「ガンネ」、「ジャンネ」は、自身の認識が不確かであることを表示し、聞き手の認識について確認を求める。

- (4) [鍵をなくしたことに気づき、周囲にいた人に確認する場面で]
あれ、私、ここに鍵置いとった {#ガネ/ガンネ/ジャンネ}。
(あれ、私、ここに鍵を置いていたよね。)

¹ 田野村 (1988) が「ではないか!」、三宅 (1996,2011) が「知識確認の要求」、宮崎 (2005) が「聞き手誘導型」と呼ぶ表現である。

一方、「ガ」に「ネ」を後接した場合は、他の助詞+「ネ」に見られるような意味用法の変化が生じないため、「ガネ」という別のガ系終助詞²と分析できる。この場合の共通語訳は「あれ、私、ここに鍵を置いていたじゃないか。」であり、終助詞「ガ」、「ガン」、「ジャン」の単独の場合（「ネ」を伴わない場合）と同様の意味となる。

以下、2節で先行研究を整理し、3節で統語的特徴について記述・整理する。4節前半では意味用法の共通点について述べ、後半では相違点について述べる。5節ではそれまでの記述を踏まえ、意味用法の共通点と相違点について考察を加える。6節はまとめと今後の課題である。

なお、本稿における「名古屋市方言」とは、愛知県尾張方言のうち名古屋市で話される言語を指す（図1）。また、「ガ」、「ガン」、「ジャン」をすべて用いる若年層に焦点を当てて記述を行う。



図1 愛知県の方言区画と名古屋市の位置³

本稿の記述は、名古屋市で言語形成期を過ごした筆者（A）の内省に基づいて行った。また、文法性判断について、現在名古屋市在住の若年層話者（B）に確認を依頼し、相違点がないことを確認した。

A:1998年生女性。～18歳名古屋市、18～広島県在住。

B:1999年生女性。0歳～現在まで名古屋市在住。

2. 先行研究

「ガ」と「ガン」は、当該方言における「ガ」系の終助詞⁴の一種である。名古屋市の方言に「ガ」系の終助詞があることは、当該方言について総合的に記述した芥子川（1971）、愛知教育委員会編（1985,1989）、飯豊・日野・佐藤編（1983）などの指摘の通りである。「ガ」の用法については、朝日（2001）が共通語類似形式との比較・整理をおこなっている。「ガン」について、用法について詳述した研究は管見の限りない。また、稲熊（2021）の調査によると、「ガ」は世代を問わず用いられるが、「ガン」は比較的若い層に用いられ、その上限は調査時点で44歳の話者（1976年生）であった。このことから、「ガ」は名古屋方言における伝統的な方言終助詞であるが、「ガン」は何らかの

² ガ系終助詞の一種に「ガネ」という形式を認める。稲熊（2021）の調査では、現在の40～80代（主に女性）が使用した。

³ 白地図専門店(<https://www.freemap.jp/>)の地図をもとに筆者が作成した。

⁴ 「ガ」、「ガン」のほかにも、「ガヤ」、「ゲア」、「ガネ」といったバリエーションが存在する。

原因で流入または発生した形式である⁵ことがうかがえる。「ジャン」は先行研究において、東海地方⁶において発生し、マスメディアを通じて共通語化したと考えられている（井上 1998）。ただし、江端（1999）は、「ジャン」が尾張方言に流入したのはマスメディアによる影響を受ける前であり、隣接する愛知県三河方言からの地理的要因によると指摘する。江端の調査結果⁷に基づくと、名古屋方言において「ジャン」を用いるようになった話者の年代層はおおよそ現在の 60 歳代（1950 年代生）であると考えられる。名古屋方言の「ジャン」の意味用法について、詳述した研究は管見の限りない。

3. 統語的特徴

3.1 生起環境

まず、「ガ」、「ガン」、「ジャン」の前接要素から記述する。すべての形式について、述語の主要部の品詞によらず生起できる。ただし、名詞述語に後接する場合において差異が生じる。「ガ」、「ガン」はコピュラを必須とするが、「ジャン」はコピュラに直接後接できない⁸。また、「ノダ」、「ハズダ」など形式名詞+コピュラからなる助動詞に「ガ」、「ガン」、「ジャン」が後接する際、コピュラが現れるか否かは名詞述語の場合に準じ、「ガ」、「ガン」は形式名詞+コピュラに、「ジャン」は形式名詞に直接後接する。他の終助詞への接続については、すべての形式において不可能である。

- (5) あそこに信号がある {ガ/ガン/ジャン}。(動詞述語)
- (6) あんた、危ない {ガ/ガン/ジャン}。(形容詞述語)
- (7) あ、山田 {だガ/だガン/*だジャン} (名詞述語—コピュラ有)
あ、山田 {*ガ/*ガン/ジャン} (名詞述語—コピュラ無)
- (8) K じゃない。あんたに聞いとるん {だガ/だガン/*だジャン}。(ノダ文—コピュラ有)
K じゃない。あんたに聞いとるん {*ガ/*ガン/ジャン} (ノダ文—コピュラ無)
- (9) *あそこに信号がある {カ/ナ/ネ/ノ/ヨ/ワ} ガ。
*あそこに信号がある {カ/ナ/ネ/ノ/ヨ/ワ} ガン。
*あそこに信号がある {カ/ナ/ネ/ノ/ヨ/ワ} ジャン。

次に、後接要素について述べる。「ガ」にはほかの終助詞を後接できない⁹。「ガン」には「ネ」が後接しうる。「ジャン」には「カ」、「ネ」が問題なく接続する。「ナ」、「ヨ」の場合は少々不自然である。以下の記述では、「ガ」は後接可能な終助詞なしとし、「ガン」は「ネ」を接続する場合、「ジャン」は「カ」と「ネ」を接続する場合について分析を進める。

- (10) あそこに信号があるガ {*カ/*ナ/*ネ/*ノ/*ヤ/*ヨ/*ワ}。

⁵ 「ガン」が新しい形式であることは、太田（2003）もすでに指摘している。

⁶ 愛知県三河地方、長野、山梨、静岡など、諸説ある。

⁷ 1966~1968年に、高年層と中学生を対象として「ジャン」の地理的分布を調査した。高年層における分布を参照すると尾張地方に「ジャン」の流入は確認されないが、中学生の分布を参照すると、「ジャン」が三河地方から地理的に伝播する過渡期にあることがわかる。

⁸ 過去形や否定形など、活用した場合は、ジャンが直接後接できる。

⁹ 繰り返しになるが、「ガネ」、「ガヤ」は（少なくとも共時的には）助詞の連続ではなく、分割できない一つの助詞として分析している。

- (11) あそこに信号があるガン {*カ/*ナ/ネ/*ノ/*ヤ/*ヨ/*ワ}。
 (12) あそこに信号があるジャン {カ/??ナ/ネ/*ノ/*ヤ/??ヨ/*ゼ/*ワ}。

3.2 使用可能な文タイプ

「ガ」、「ガン」、「ジャン」は平叙文で用いられ、典型的な疑問文、命令文、勧誘文などでは使えない。

- (13) あそこにコンビニがある {ガ/ガン/ジャン}。(平叙文)
 (14) あんたが行く {*ガ/*ガン/*ジャン} ? (真偽疑問文)
 (15) 誰が行く {*ガ/*ガン/*ジャン} ? (疑問詞疑問文)
 (16) お前が行け {*ガ/*ガン/*ジャン}。(命令文)
 (17) 一緒に行こう {*ガ/*ガン/*ジャン}。(勧誘文)

3.3 統語的特徴のまとめ

統語的特徴について整理する。まず、「ガ」、「ガン」、「ジャン」すべてに共通するのは、接続する文タイプが平叙文に限られる点、他の終助詞を前接できない点である。相違点は、コンピュータ相当の意味を含むかどうかと、終助詞「ネ」を接続できるかどうかに現れた。コンピュータ相当の意味を含むかどうかでは「ガ」、「ガン」は含まない、「ジャン」は含むという違いが表れたのに対し、終助詞「ネ」の接続については、「ガ」は不可能だが、「ガン」、「ジャン」は可能であるという結果であった。

4. 用法

用法は、蓮沼 (1992,1995)、三宅 (1996,2011)、宮崎 (2005) を参考に分類した¹⁰。

4.1 「ガ」「ガン」「ジャン」に共通する用法

「ガ」、「ガン」、「ジャン」に共通する用法は〈認識の同一化要求〉、〈潜在的共有知識の活性化〉、〈認識生成のアピール〉の3つに分類できる。それぞれの用法について以下 4.1.1~4.1.3 で詳述する。

4.1.1 〈認識の同一化要求〉

この用法は、話し手にとって確実な認識 P を聞き手が認識していないことを示し、同様の認識を持つように要求する。例えば例文(18)の場合、「夜中に一人で出歩いたら危ない」という一般的常識 P に照らし合わせ、P を認識していない聞き手に認識を同一化するよう要請する。この用法において「ジャン」には任意に「カ」を後接できる。音調について補足すると、「ガ」、「ガン」、「ジャン」は基本的に前接形式に対して低く接続しやすいという特徴がある¹¹。

¹⁰ 「ガ」、「ガン」の用法については稲熊 (2021) でも扱っているが、分類と説明を改めた点がある。主な修正点として、〈認識形成の要請〉と〈異議表出〉を〈認識の同一化要求〉にまとめたこと、〈潜在的共有知識の活性化〉と改めたことがある。

¹¹ 直前形式のアクセントが起伏式の場合、そのまま低くつき、平板式の場合、直前形式に対して低くつく。以下同様。

(18) [夜中に]

A:ちょっと、コンビニ行ってくるわ。

B:一人で行くの？危ない {ガ/ガン/ジャン (カ)}。

(一人で行くの？危ないじゃないか。)

(19) [料理が出されて]

A:あ、ネギ乗っとる。俺、苦手なんだわ。

B:ええ、おいしい {ガ/ガン/ジャン (カ)}。

(ええ、おいしいじゃないか。)

(20) [冷蔵庫にプリンを入れておいたのに無くなったことに気づいた]

A:ちょっと！冷蔵庫にあったプリンがないんだけど！

B:そんなん知らん {ガ/ガン/ジャン (カ)}。

(そんなの知らないよ。)

4.1.2 <潜在的共有知識の活性化>

この用法は、話し手の認識 P は聞き手にとっても本来確実であるという見込みがあるが、それが確かでない場合に、同様の認識を活性化させる。例文(21)は発話現場における視覚的な認識、(22)は話し手と聞き手が過去の経験において共有する認識、(23)は話し手と聞き手との間で仮に構築した認識を活性化する場合である。なお、この用法において「ガン」、「ジャン」にはともに任意の「ネ」を後接できる。「ジャン」には「カ」も任意に後接できる。また、音調は、末尾音節内で下降を実現しやすい¹²ことが特徴である。終助詞が接続しない場合は「ガ」、「ガン」、「ジャン」、終助詞が接続する場合は「ネ」および「カ」が「末尾音節」に該当する。

(21) [道案内をしているときに]

A:あそこにコンビニがある {ガ/ガン (ネ) /ジャン (ネ/カ)}。

(あそこにコンビニがあるじゃないか。)

B:はいはい。あるね。

(22) [高校の同級生の話題を出すときに]

A:S ちゃんって人さ、陸上部におった {ガ/ガン (ネ) /ジャン (ネ/カ)}。

(S ちゃんという人が、陸上部にいたじゃない。)

B:あー、おったねー。

(23) [ミーティングの場所を決めるときに]

A:たぶん、20 人くらいは来れる {ガ/ガン (ネ) /ジャン (ネ/カ)}。

(たぶん、20 人くらいは来られるじゃない。)

B:そうね。

4.1.3 <認識生成のアピール>

この用法は、話し手の従来の認識 Q が現場の状況により更新され、新たな認識 P が生成されたことを驚きとともに表示する。例えば例文(24)の場合、「箱にお菓子が入っている」という従来の認識

¹² 直前形式のアクセントが起伏式の場合、高く接続しなおし、末尾音節内で下降する。平板式の場合、そのまま高い音調を受け継ぎ、下降する。以下同様。

Q が実際に箱を開けることで更新され、「箱の中身は空っぽだ」という新たな認識 P を生成したことを驚きとともに表示する。聞き手がいる場合、その驚きがアピールされ、新たな認識 P について副次的に聞き手にも反応を求める。例えば例文(25)では、「友人が髪を切った」という新たな認識について、その気づきを聞き手にアピールしつつ、その認識について確認を求める。例文(26)も同様である。なお、聞き手がいる場合、「ジャン」は任意の「カ」を後接できる。基本的に、「ガ」、「ガン」、「ジャン」は前接形式に対して低く接続する。

(24) [お菓子を食べようと思って、箱を開けてみると空だった]

(独り言で) なんだ、空っぽ {だガ/だガン/ジャン}。

(なんだ、空っぽじゃないですか。)

(25) [友人が髪を切ったことに気づいて]

A: おっ、髪切っとる {ガ/ガン/ジャン (カ)}。

(おっ、髪を切ってるじゃないですか。)

B: そうなの。いいでしょ。

(26) [久しぶりに友達のペットに会って]

あれ、大きくなった {ガ/ガン/ジャン (カ)}。

(あれ、大きくなったじゃないですか。)

4.2 「ガ」「ガン」「ジャン」に共通しない用法

次に、「ガ」、「ガン」、「ジャン」に共通しない用法である、〈新規情報導入〉と〈相互了解の形成確認〉について述べる。これらは別の形式「ノダ」および「ネ」との連続に伴う機能の拡張/変化によって生じる用法である。〈新規情報導入〉は「ノダ」との連続に伴って生じる用法である。「ノダガ」と「ノダガン」のみに認められ、「ノジャン」で表すことはできない。〈相互了解の形成確認〉は「ネ」との連続によって生じる用法である。「ガンネ」と「ジャンネ」に認められ、「ガネ」にはない。

4.2.1 〈新規情報導入〉

「ノダ」の前接に伴って生じる用法である。「ノダガ」と「ノダガン」のみに認められ、「ノジャン」にはない。ただし、若年層話者においてもこの用法を認めるかどうかでは回答が割れる¹³ため、この用法が拡大過程にあるか、もしくは用法にも何らかの差が生じていることを断っておく。この用法は、これから展開する話題のために、聞き手が知らない話し手の情報について談話の場に導入し、その情報について把握を求める¹⁴。「ガン」には任意の「ネ」を接続できる。音調は、末尾音節内で下降を実現する。

(27) 昨日、買い物に行ってきたん {だガ/だガン (ネ) /*ジャン (ネ)}。そしたら…

(昨日、買い物に行ってきたんだよね。そうしたら…)

(28) 俺、この前、初めてケーキ作ったん {だガ/だガン (ネ) /*ジャン (ネ)}。そんで…

¹³ 稲熊 (2021) が 2020 年に行った調査において、この用法を認めるのは若年層 (20 代) 話者 6 名のうち半数であった。また、中年層以上でこの用法を認める話者はいなかった。

¹⁴ 松丸 (2012) が「話題の活性化」と呼ぶ用法である。

(俺、この前、初めてケーキを作ったんだよね。それで…)

4.2.2 〈相互了解の形成確認〉

「ネ」の後接に伴って生じる用法である。「ガンネ」と「ジャンネ」のみに認められる。この用法は、聞き手の認識Pについて、話し手の認識と一致しているかについて了解を求める。認識の一致について確認が必要な文脈として、「話し手の認識が確実でなく、認識において優位な聞き手に確認してもらふ必要がある」場合(例(29)と(30))と、「ほとんど認識の一致が見込めるが、聞き手も同様の認識を持つかどうかが不確実であるため、あらためて確認を求める」場合(例(31))がある。「ガ」は先述の通り「ネ」を後接して異なる意味を表すことができない。音調は、末尾音節内で下降を実現することが特徴である。

- (29) [外出中。家を出る時にエアコンを消したはずだが不安になり、居合わせた人に確かめる]
あれ、私、エアコン切った {#ガ/#ガン/ガンネ/#ジャン/ジャンネ}。
(あれ、私、エアコンの電源を切ったよね。)
- (30) [共通の恩師の話をしていて]
A: K先生って、確か、息子さんおった {#ガ/#ガン/ガンネ/#ジャン/ジャンネ}。
(K先生って、息子さんがいたよね。)
B: おったおった。
(いたいた。)
- (31) [「名古屋弁クイズ」を一緒にやってみて、2人とも全問正解した]
A: こんな余裕 {#だガ/#だガン/だガンネ/#ジャン/ジャンネ}。
(こんなの余裕だよね。)
B: 簡単すぎるね。

「ガ」、「ガン」、「ジャン」を用いた場合も文が成立するが、機能が異なる。例えば例文(32)では、話し手の確実な認識について聞き手に確認させる意味となる。これは先述した〈認識の同一化要求〉に相当する。(33)は予想していたよりも簡単だったという驚きを表示する意味となる。これは〈認識生成のアピール〉に該当する。

- (32) [外出中に]
A: あれ、あんた、ちゃんとエアコン切った?
B: 切った {ガ/ガン/#ガンネ/ジャン/#ジャンネ}。
(切ったじゃないか。)
- (33) [「名古屋弁クイズ」を一緒にやってみて、2人とも全問正解した]
A: こんな余裕 {だガ/だガン/#だガンネ/ジャン/#ジャンネ}。
(こんなの余裕じゃないか。)
B: 簡単すぎるね。

5. 考察

これまで、「ガ」、「ガン」、「ジャン」の用法について、共通点と相違点に分けて記述と整理を行

った。5 節では、すべての形式に共通する用法と、一部の形式にしかない用法との違いに注目し、「ガ」、「ガン」、「ジャン」の意味用法における特徴について考察する。

先述の通り、すべての形式に共通する用法は〈認識の同一化要求〉、〈潜在的共有知識の活性化〉、〈認識生成のアピール〉の 3 つ（これ以降、「全形式に共通する用法」）である。これらの用法は、「発話時において話し手の認識が確実であり、聞き手もその認識にアクセスが可能な状況で、聞き手の認識を誘導し、確認を求める¹⁵」という点で共通している。

(34) [夜中に]

A: ちょっと、コンビニ行ってくるわ。

B: 歩いて行くの？ 危ない {ガ/ガン/ジャン (カ)}。

(歩いて行くの？ 危ないじゃないか。) ((18)再掲)

(35) [道案内をしているときに]

A: あそこにコンビニがある {ガ/ガン (ネ) /ジャン (ネ/カ)}。

(あそこにコンビニがあるじゃないですか。)

B: はいはい。あるね。((21)再掲)

(36) [友人が髪を切ったことに気づいて]

A: おっ、髪切っとる {ガ/ガン/ジャン (カ)}。

(おっ、髪を切ってるじゃないか。)

B: そうなの。いいでしょ。((25)再掲)

一方、「ノダガ」、「ノダガン (ネ)」にある〈新規情報導入〉は、発話時における話し手の認識は確実であるが、聞き手はその情報について知らない前提で情報を導入し、その情報について把握を求める。「ノダ」は情報を既定の事態として提示する、「非関係づけの対人的ムード (野田 1995)」としての機能を担い、「ガ」が聞き手との共通認識を構築する標識となっている。

(37) 昨日、買い物に行ってきたん {だガ/だガン (ネ) /*ジャン (ネ)}。そしたら…

(昨日、買い物に行ってきたんだよね。そうしたら…) ((27)再掲)

「全形式に共通する用法」と比較すると、〈新規情報導入〉は、聞き手にとって「新規の (アクセスできない) 情報」について導入する点で異なる¹⁶。言い換えれば、「ガ」と「ガン」は、「ノダ」に後接すると、聞き手が本来アクセスできない情報をも共有する標識となるが、「ジャン」はそれが不可能であると言える。

また、先述の通りこの用法は若年層の一部にしか認められない。このことから、「ガ」、「ガン」は「ノダ」を前接することで、聞き手のアクセスできない情報をも導入できる方向に用法を拡張しつつあることがうかがえる。

次に、「ガンネ」、「ジャンネ」にある〈相互了解の形成確認〉について考える。この用法は、「話

¹⁵ 〈認識の同一化要求〉では、聞き手にアクセスできない情報を提示する場合 (例文(20)のような場合) があるが、話し手はあくまで「聞き手が当然知っているべきこと」として提示する点で、〈新規情報導入〉とは異なる。

¹⁶ 用法によっては「ノダ」にも「ジャン」が後続しうる (名詞述語の場合と同様、この場合コピュラは現れない) ため、統語的制限ではなく、意味的制限によるといえる。

し手の認識が不確実」あるいは、「話し手の認識は確実だが聞き手と一致しているかが不確実」である際に、聞き手の認識 P を対象として、話し手の認識と一致しているかについて確認を求める。ここでの「ガン」および「ジャン」は、聞き手との共通認識を仮に構築する標識となり、必須の「ネ」がその一致について確認を求める機能を担う。

(38) [共通の恩師の話をしていて]

A:K 先生って、確か、息子さんおった {#ガ/#ガン/ガンネ/#ジャン/ジャンネ}。

(K 先生って、確か、息子さんがいたよね。)

B:おったおった。

(いたいた。)(30)再掲)

(39) [「名古屋弁クイズ」を一緒にやってみて、全問正解した]

A:こんな余裕 {#だガ/#だガン/だガンネ/#ジャン/ジャンネ}。

(こんなの余裕だよ。)

B:簡単すぎるね。(31)再掲)

「全形式に共通する用法」と〈相互了解の形成確認〉の違いは、話し手にとって確実な認識を示すか、何らかの不確実性を含んだ認識を示すかに表れる。「全形式に共通する用法」は、話し手にとって確かな認識を示し、聞き手の認識を誘導することで、その情報の確定化を図る。一方、〈相互了解の形成確認〉は、何らかの不確実性を含んだ話し手の認識を提示し、聞き手に確実にしてもらうことで、その情報の確定化を図る。認識一致の確定が成功するかどうかは、聞き手の認識の状態に依存するという点である。このことから、「ガン」と「ジャン」は「ネ」と連続させることで、「確実な認識を示し、聞き手の認識を誘導する標識」から、「不確実性を含んだ認識を示し、聞き手の認識共有を誘導する」標識へと変化できる特徴があると考えられる。なお、この際「ネ」の後接は必須であり、共有した認識に同意するかどうかの確認を求める機能を担っていると考えられる。

以上から、〈相互了解の形成確認〉にあたる用法を「ガンネ」と「ジャンネ」が共有し、「ガ+ネ」が表しえないという点で、「ガン」と「ジャン」は「ガ」にない類似点を持つと言える。先行研究の記述や調査結果も加味し、通時的な視点で見ると、当該方言に「ガ」系の終助詞（「ガ」、「ガヤ」、「ゲャ」、「ガネ」）がある状態で「ジャン」が三河方言から流入し（1950年代～）、用法および音韻的特徴から類推が起り、「ジャン」と同様に「ネ」を後接し複合的な意味を表す「ガン」が発生（1970年代～）したことが推測できる。ここで問題となるのが、なぜ「ガ」が「ネ」を接続して複合的な意味を表さないのかということである。現時点では、「ジャン」の流入よりも先に「ガネ」という通時的に助詞接続ではあるが、共時的には分解できない形式が当該方言に存在しており、混同を防ぐために、複合による意味拡張が困難になったと解釈する。また、「ガン」、「ジャン」について、「ネ」の接続を許す用法はすべて末尾音節内で下降イントネーションを取りやすいという共通点がある。末尾音節内で下降する音調と「新しい形式」との関連については、今後検討すべき課題としたい。

最後に、論旨とは逸れるが、「ジャン」について、東京方言（松丸 2001）および愛知県三河方言（峰田 2001、山本 2010）との違いについても触れておきたい。東京方言、三河方言の「ジャン」と共通するのは〈認識の同一化要求〉、〈潜在的共通認識の活性化〉、〈認識生成のアピール〉に相当す

る3用法である¹⁷。

東京方言には、加えて、「推定¹⁸」にあたる用法がある。

(40) [不審な様子から]

どうもあの男、犯人ジャン？（犯人じゃないか？）（松丸 2001 より引用）

愛知県三河方言には、〈新規情報導入〉にあたる用法がある。その場合、述語に直接接続し、「のだ」相当の形式は介さない。

(41) A:高1の時浜名湖行ったでしょ、遠足で。

B:え、そうだっけ。そういうこと全然覚えてない {ジャン/ジャンネ/ジャンカ}。

（そういうこと全然覚えてないんだよね。）（山本 2010 より引用）

以上から、名古屋市方言における「ジャン」は、いわゆる共通語化に一役買った東京方言や、地理的伝播の指摘される三河方言とも異なる性質があることが指摘できる。

6. まとめと今後の課題

本稿では、名古屋市方言の終助詞「ガ」、「ガン」、「ジャン」を対象とし、形式的特徴と用法について記述し、異同について考察した。明らかになったことを以下にまとめる。

I 形式的特徴

名詞述語、および、形容詞+コピュラからなる助動詞の接続において「ガ」、「ガン」はコピュラを必須とするが、「ジャン」は不要である。「ジャン」がコピュラの意味を含んでいるためである。一方で、後接要素については、「ガ」が他の終助詞を接続して複合的な意味を表さないのに対して、「ガン」と「ジャン」は「ネ」をそれぞれ後接し、複合的な意味を表すことができる点で共通した。

II 用法

「ガ」、「ガン」、「ジャン」は、〈認識の同一化要求〉、〈潜在的共通認識の活性化〉、〈認識生成のアピール〉の3つの用法を共有した。これらの用法は、「発話時において話し手の認識が確実であり、聞き手もその認識にアクセスが可能な状況で、聞き手の認識を誘導し、確認を求める」という点で共通する。「ガ」、「ガン」、「ジャン」に共通しない用法には、〈新規情報導入〉と〈相互了解の形成確認〉がある。〈新規情報導入〉は、聞き手にとって新規の情報を導入できる点で「3つの用法」とは異なる。「ノダガ」、「ノダガン(ネ)」にあり、「ンジャン」にはない。この用法には世代差があることから、「ガ」、「ガン」において「ノダ」の連続に伴う用法の拡張が生じたことがうかがえる。〈相互了解の形成確認〉は話し手にとって何らかの不確実性を含んだ認識を示し、聞き手の認識に依存して認識一致の確定が行われる。その点で、話し手にとって確実な認識を示す、「3つの用法」とは性質を異にする。「ガンネ」、「ジャンネ」にあり、「ガ+ネ」にない（そもそも「ガ」は助詞接続によって複合的な意味を表せない）。

¹⁷ 〈相互了解の形成確認〉については不明。

¹⁸ 田野村（1988）における「ではないか₂」、三宅（1996,2011）の「命題確認の要求」に相当する。

本稿では、当該方言における新形式「ガン」と流入した形式「ジャン」の共通性について指摘した。しかし、「ガン」が「ジャン」由来であるとはまだ断定できない。また、若年層でも「ガン」を使用する話者とそうでない話者がおり、その差がどこに起因するのかは明らかになっていない。今後の課題として、幅広い世代、地域を対象に量的な調査を行うことが挙げられる。また、本稿では文末音調についての考察が不十分であるため、さらなる検討が必要である。

参考文献

- 愛知教育委員会編（1985）『愛知のことは：愛知県方言緊急調査報告書』
愛知教育委員会編（1989）『愛知県の方言』文化財図書刊行会
朝日祥之（2001）「名古屋市方言における文末詞「ガ」」『阪大社会言語学ノート』3
飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編（1983）『講座方言学 6:中部地方の方言』国書刊行会
稲熊詩帆（2021）「名古屋方言におけるガ系終助詞:用法・音調と性差・世代差」『日本方言研究会第112回研究発表会発表予稿集』日本方言研究会
井上史雄（1998）『日本語ウォッチング』岩波書店
江端義夫（1999）「「ジャン」の現代史」木坂基先生退官記念論文集編集委員会編『日本語表現法論攷』溪水社
芥子川律治（1971）『名古屋方言の研究』泰文堂
郡史郎（2015）「日本語の文末イントネーションの種類と名称の再検討」『言語文化研究』41
太田有多子（2003）「小事典 ふるさとのことば 23 愛知県」『言語』74（5）
田野村忠温（1988）「否定疑問文小考」『国語学』152
野田春美（1997）『の「だ」の機能』くろしお出版
蓮沼昭子（1992）「終助詞の複合形『よね』の用法と機能」『対照研究』2
蓮沼昭子（1995）「対話における確認行為:「だろう」「じゃないか」「よね」の確認用法」仁田義雄編『複文の研究（下）』くろしお出版
松丸真大（2001）「東京方言のジャンについて」『阪大社会言語学研究ノート』3
松丸真大（2012）「日本語の攻防【言語変種】確認要求表現の広がり」『日本語学』31（6）
嶺田明美（2001）「愛知県東部方言における文末詞についての研究（2）文末詞ジャンの首都圏における用法との比較」『学苑』729
三宅知宏（1996）「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』89
三宅知宏（2011）『日本語研究のインターフェイス』くろしお出版
宮崎和人（2005）『現代日本語の疑問表現:疑いと確認要求』
山本剛史（2010）「愛知県東部地方（東三河地方）における「ジャン」の用法」『方言・音声研究』4

（広島大学大学院博士課程前期1年）